

亡霊たちの近代

—— イギリス・ゴシック小説考 (2) ——

吉川 信

英語教育講座

(2010年9月24日受理)

Ghostly Modern (2): Maturin's Melmoth, or a Beginning of "Irish Gothic"

Shin KIKKAWA

Department of English, Faculty of Education, Gunma University

(Accepted on September 24th, 2010)

ヨーロッパにおける「ケルティシズム」の流行は19世紀に始まる。フランスはもとよりドイツやイングランドにおいても、おのが民族こそケルトの血を引くもの、との主張がまことしやかに流布し始める⁽¹⁾。イングランドのイデオログ、マシュー・アーノルド (Matthew Arnold, 1822-88) は、「ケルト」の自由奔放な想像力、理性よりも感性の鋭利さ、ロマンティックな情熱——およそ「女性的な」と形容されてきた特質のほとんど——を、イングランド人にも見出される「ケルト的特質」と褒め称えた⁽²⁾。(だからこそ、「男性的」アングロ=サクソン〔イングランド〕は「女性的」ケルト〔スコットランド、ウェールズ、アイルランド〕を「政治的に導く」資格を有する、という論旨も「正論」となっていく。) だが結局のところこのブームはロマンティシズムの延長であり、元を辿れば「ゴシック・ブーム」と同根である。同じ、民族主義的なアイデンティティの主張、と考えることができる。しかし、「ゴシック・ブーム」と「ケルト・ブーム」は、アイルランドの住民にとっては大きく意味が異なっていた。

どのヨーロッパ諸国よりも濃厚な「ケルティシズム」を保持していた19世紀のアイルランドは、このブームをイングランドからの独立運動に利用するこ

とができた。だが「ゴシック」はそうではない。イングランドにおける「ゴシック・ブーム」は、あくまでもイングランドのナショナリズム、反ローマカトリシズムのブームである。18世紀に始まるイギリス・ゴシック小説は、いずれもローマカトリック教会とカトリック教徒を容赦なく弾劾する。カトリックをどこまでも敵として描くのがゴシック小説の伝統と言ってよい。したがって、カトリック勢力の脅威も失せ、もはやその恐怖を煽る必要もなくなった19世紀半ばのイングランドでは、“terror”や“horror”を醸し出すゴシック小説の「謎」を秘めた形式が、「ミステリー」もしくは「推理小説」(detective story) に受け継がれて行く。いっぽう、カトリック教徒がマジョリティであり、なおかつ前世紀のカトリックの反乱の記憶が覚めやらぬアイルランドにあっては、マイノリティのプロテスタント、すなわちアングロ=アイリッシュの作家たちが、数多くのゴシック小説・亡霊譚を物し、未だ終息せぬ恐怖を語り続けることになる。

もっとも著名な作品としては、ブラム・ストーカー (Bram Stoker, 1847-1912) による『ドラキュラ』 (Dracula, 1897) をあげることができようし、これ以前にもシェリダン・レ・ファニユ (Joseph Sheridan

Le Fanu, 1814-73) は、女吸血鬼の物語「カーミラ」(‘Carmilla’, 1872) を執筆している。一見人間の姿をしながらも人間を捕食する異形のものたちは、日常に紛れ込む同時代の恐怖である。ようするに、彼らアングロ＝アイリッシュには、19世紀後半に入っても未だ「悪のカトリック教徒」に包囲されている、という不安があった。折しも1829年には、アイルランドにおいてカトリックの市民権が回復された。このため世紀後半にはカトリックの中産階級なるものが出現し、やがて数のうえでプロテスタント・アセンダンシーを凌駕するものとなる。だからこそこの時代、アングロ＝アイリッシュの作家たちは、ゴシック小説という形で、イングランドの、あるいはプロテスタントの、不安を掻き立てる物語を醸成し得たのだ。

換言すれば、宗主国でブームが去った後の19世紀半ば以降、ゴシック小説の伝統は、アングロ＝アイリッシュこそが担うべくして担った、というのが本稿の前提とする仮説である。そこでまず、19世紀前半にアングロ＝アイリッシュによって書かれた作品、「イギリス・ゴシック・ブーム」の掉尾を飾る小説を取り上げたい。未だヘゲモニーの転覆など予測し得なかった時代、あくまでイギリスの読者のみが意識されていた時代に、作家はアイルランドならではの物語を紡いでいる。ここに含まれるアングロ＝アイリッシュ独自の筆致が、その後どのように受け継がれて行ったかは、いずれ考察に附されねばならない。アイルランドのプロテスタント牧師(ただしフランスからの移民でユグノー教徒)、チャールズ・ロバート・マチューリン(Charles Robert Maturin, 1782-1824)が、アイルランドを舞台に描いた『放浪者メルモス』(*Melmoth the Wanderer*, 1820)は、複数の入れ子の中で語り手たちが交錯する複雑な構造を備えている。粗筋を辿るだけでもいささか誌面を要することになる。

『放浪者メルモス』

1816年秋、トリニティ・カレッジ・ダブリンの学生ジョン・メルモス(John Melmoth)は、死期の迫っ

た伯父のもとを訪れる。若者にはもはやこの伯父以外頼るべき親族はなく、伯父にとってもこのジョン以外財産を遺贈する親族はいない。そこでジョンは、伯父の住むウィックロー(ダブリンの南)の海岸近くにある屋敷にやってくるのだが、まずはこの屋敷で、異様な眼をした先祖の肖像画を見つけ、また手記を見つける。伯父は死の間際甥に向かい、その手記を読まずに燃やせと命じるが、好奇心に駆られたジョンは、伯父の死後これを読んでしまう。

これはスタントン(Stanton)という男の手記で、ある不思議な人物との出会いを語っている。この人物はスタントンに、おまえはやがて不幸な目に遭うだろう、そしてmadhouse(現代の「精神病院」というよりは「狂人収容所」と言うべき語; 同義でBedlam〔癲狂院〕という語も用いられている)に閉じ込められるだろう、と予言する。果たしてこの予言が当たり、スタントンは親族の陰謀でそこに閉じ込められる。やがて彼のもとに先の謎の人物が現れ、魂を売れば助けてやるとの条件を持ちかける。この人物こそが「放浪者メルモス」であり、若いジョン・メルモスにとってはおよそ150年前(17世紀半ば)に生まれた先祖である。だが、スタントンはこの誘惑を拒否し、やがて自力でmadhouseから逃亡を果たす。

手記を読んだジョンは恐怖に震え、異様な眼の肖像画こそがその「放浪者メルモス」であると悟り、この絵を燃やす。その後、ある嵐の夜、屋敷近くの海岸に難破船が漂着する。乗組員にひとり生存者がいると見てジョンは荒海に飛び込み助けに向かう。このとき、ジョンは岩場の上に立つ怪人を眼にする。結局ジョンのほうに溺れてしまい、乗組員に助けられる。そして、このスペインの船員を、家に迎え入れることになる。彼は、マドリッドの領主モンサダ(Monçada)家の一人息子アロンソ(Alonzo)であり、彼が語り手となる「スペイン人の物語」(Tale of the Spaniard)が、以後この小説の大部分を包摂する。全四巻中、第二巻までがアロンソ自身の身の上話であり、第三巻において彼の読む手記が「インド人の物語」(Tale of the Indians)、そのなかでさらに「グスマン一族の物語」(Tale of Guzman's Family)と

「恋人たちの物語」(The Lovers' Tale) が語られている。

アロンソはモンサダ家の長男ではあるが、両親の婚前交渉(当時としては立派な姦淫である)で生まれたため世間に知られないよう育てられ、やがて本人の意志も顧慮されることなく修道院に送られる。両親はこの子の誕生より前に、カトリックの聴罪司祭に、生まれればイエズス会の修道院に入れると約束していたのだった。裕福な名家との繋がりを欲する神父と修道会は、子を修道院に捧げることが姦淫の贖罪となると仄めかしたのである。その後両親にはもう一人息子が生まれ、この次男ファン(Juan)が正式な跡取りとされる。だがこのような不条理の許せないアロンソは、18歳で修道院からの脱出を図る。弟ファンはこの計画に尽力するが、脱出の途上、それまで二人に力を貸していた修道士によって殺される。この修道士は、修道院に身を潜める父親殺しの殺人犯であり、それまでは金銭で脱出計画に手を貸していたのだが、最後の段階で修道院長側に寝返り、ファンを殺すことになる。脱出に失敗したアロンソは、修道院から異端審問所に身柄を移され監禁される。そして彼のもとにも、放浪のメルモスがやってくる。施錠された独房にどこからともなく入ってきて、助けて欲しければ魂を寄越せと誘惑する。しかしアロンソはこの誘惑をはねつける。

やがてアロンソは、異端審問所の火事に乗じてここを抜け出し、マドリッドの街路を彷徨った挙句ある「隠れユダヤ人」の家に逃げ込む。このユダヤ人一家は、すでにカトリックに改宗したということで逮捕を免れているが、実は家の中で密かにユダヤ教の儀式を行なっている。たまたまこれを目撃したアロンソは、異端審問所に黙っていて欲しければ自分を匿え、と脅し、ここに隠れ住むことになる。だがやがてここにも捜査の手が回る(例の父殺しの修道士は、素姓を暴かれ、通りで暴徒の群れによって惨殺されるが、この惨劇を目にして立ちすくむアロンソが、捜査員に目撃されるためである)。アロンソはユダヤ人に教えられた地下室から地下通路を通り、別な地下の一室に辿り着く。そこには107歳のラビ、アドナイジャ(Adonijah)が隠れ住んでいる。アロ

ンソはアドナイジャのもとでしばし書記の仕事を務めるが、ここで150年前の手記を目にする。これが、小説の後半大部分を占める「インド人の物語」である。

「インド人の物語」

インド洋のとある無人島に白人の娘がひとり暮らしている。周辺の土地のインド人たちは女神と噂し、イマリー(Immalee)と呼んでいる。どうやらスペインの難破船が残していった娘であるらしい。だが話し相手もおらず、野鳥や野生の花々だけを友とし、水に映る自分の姿も友人と考えている。花や木はこれまでに何度も死んでは蘇り、しかし自分は未だに生きているのだからかなりの年寄りだ、と考えている。だが実際は10代後半である。(幼少期に話していたのはヨーロッパの言語だったが、乳母が死んだ後はたったひとりで暮らしていた、とされている。ならば言語能力の発達すらおぼつかないはずだが、これについては19世紀初頭の言語観であることを考慮せねばなるまい。ちなみにアヴェロン野生児が捕縛されたのは1800年だが、作者がこれを意識していたとは思えない。)美しく穢れを知らない乙女であり、インドの黒人たちは手漕ぎの舟でこの島を通過する際、たまたまこの「白い女神」を見かけると、供え物を島に向かって流す。それ以外、概して島の果実が彼女の食物であつたらしい。

やがてここに、彷徨えるメルモスが訪れる。イマリーは、初めて自分と同じ肌の色の、自分と同じ言語を話す人間に出遭って歓喜する。彼女の魂を奪うためにやってきたメルモスも、彼女に対しては人間的な感情を抱かざるを得ない。彼がイマリーに語る言葉は、人間の悪を説く教育的な言辭であり、作者の教説を思わせもする。メルモスは、望遠鏡で彼女にインドの都市を見せてやり、ヒンズー教の寺院やイスラム教の寺院、そしてキリスト教の教会を見せ、宗教というものがいかに人間の悪を育むものであるかを説く。しかしイマリーは、それらの宗教のなかで、キリスト教だけは美しく穏やかなものに見え、是非あの宗教に触れてみたい、と言う。(すべての宗

教に批難を浴びせるメルモスだが、ここにはキリスト教に対する作者のアンビヴァレンスが露呈している。)

やがて二人は愛し合うようになり、メルモスは嵐の中で「おまえを娶る」と言い、イマリーも「永遠にあなたのものになります」と誓う。だが、雷鳴の轟く中、気絶したイマリーを残し、メルモスはこの島から去る。そしてこの別離から3年後(1683年)、ヨーロッパの船に発見され祖国に連れ戻されたイマリーは、マドリッドでメルモスに出会う。イマリーは今ではイシドーラ (Isidora) という本名で呼ばれている。

イシドーラはマドリッドに住む母クララ (Clara) と兄フェルナン (Fernan) のもとに暮らす。母は娘を修道院に入れることを考え、聴罪神父ホセ (Jose) もこの意見に賛成している。しかしイシドーラの部屋の窓辺には、夜な夜なメルモスが訪れる。彼女はメルモスに、結婚するならば両親に会い許可を得て欲しいと言う。メルモスはこれを承諾する。イシドーラは、もし両親に会えば、両親はメルモスの財産や祖国のことを尋ねるだろう、その場合なんと答えればよいか、と尋ねる。メルモスはここで、何かを答えて再び姿を消す。彼がなんと答えたかは、文脈から推測する以外ない。

「おまえはわたしのものだ!」「そう、わたくしはあなたのものです。でもわたくしの家族に是非頼んで (solicit) ください」「ああ、たしかにそうしよう。懇願/誘惑 (solicitation) はわたしの得意とするところだ」「それから」「うむ、なんだ? 躊躇っておるな」「躊躇っております」と無邪気で内気なイシドーラは言う、「なぜなら」「ふむ?」「なぜなら」と彼女は突然涙を流しながら言い足した、「あなたが話そうとしている相手は、わたくしのような神の言葉を語る者たちではないのです。あの人たちは富や持参金の話をするでしょう。あの人たちはあなたが財産や広大な領地を持っているとお話しになったその国について尋ねることでしょう。それをわたくしが聞かれたら、わたくしはなんと答えればよいのでしょうか?」

これを聞いてメルモスは、できるだけ窓に近づき、ある単語を口にした。最初イシドーラにはそれが聞こえず、理解できなかった——震えながら彼女は聞き返した。さらに低い声で、答えが返ってきた。信じられなかった——それが偽りの答えであることを期待しながら、彼女はもう一度言つてと嘆願した。壊滅的な、語るべからざる単音節が、彼女の耳に雷鳴のごとく響いた。そして彼女は、悲鳴をあげて窓を閉じた。ああ! 怪人の姿は締め出したが、そのイメージはなおも付き纏った。(355)⁽³⁾

おそらくは“hell”の一語であったろう。悪魔の遣いであればその祖国はこの単音節で現せる。しかし、同時に彼の故郷がアイルランドであることを思い合わせれば、なんとも辛辣な一語である。清教徒革命時アイルランドでカトリック征伐を行なったオリヴァー・クロムウェル (Oliver Cromwell, 1599-1658) が抵抗勢力に向かって言ったとされる言葉「地獄かコナハトへ行け」(“To Hell or to Connaught”)を思い出しても良い。(アイルランド西部のコナハト地方は、現在でもいくつかのゲール語地帯を残しており、もっとも「アイルランドらしい」地域とされる。)

メルモスはその後もしばしば彼女のもとを訪れ、彼女の純情さに絆され人間味を垣間見せるが、そのため彼女のもとを去るときには、愛するがゆえに二度とおまえのところには現れないと誓いもする。それでも性懲りもなく再訪してしまう点は恋愛劇のリアリティを備えているかもしれない。両親への正式な紹介を主張するイシドーラも、やがてはその現実味のなさに気付く。つまりは、どちらも結ばれたいと願う男女の密かな逢瀬と逡巡が精緻に辿られているものの、現代の読者にはいささか安っぽいメロドラマを思わせる憾みがあろうか。

しかし、やがてイシドーラの父フランシスコ・アリアーガ (Francisco di Aliaga) から母のもとへ手紙が届く。アリアーガは海外各国で商取引を行なう商人であり、今回は旅先でグレゴリーオ・モンティヤ (Gregorio Montilla) という若者に出会い、これをイシドーラの婿にしようと連れ帰る計画である。

手紙を読んだ母はその気になるが、イシドーラはメルモス以外の男と結婚するなら死にたいと思う。そこで再来したメルモスは、ならばイシドーラの願いを叶えようと、彼女を窓から連れ去り、廃墟の修道院にて、謎の修道司祭に式を挙げてもらう。イシドーラは、その司祭の腕が死体のように冷たいことに気付く。

「グスマン一族の物語」、「恋人たちの物語」

ここで、物語はさらに別の物語を抱え込む。旅を続けるアリアーガは、未だインド洋から帰還した娘を目にしていない。現在はモンティーヤを連れマドリッドに帰る途上だが、ある晩モンティーヤと別行動となり、一軒の宿屋に辿り着く。宿屋の入り口で不思議な男に出会うが、宿屋の主人はその男を追い払う。理由を尋ねると主人は、その男こそ「放浪者メルモス」であり、不幸な人間のもとに訪れては魂を売り渡すよう誘惑する、悪魔の手先である、と説明する。この宿屋でアリアーガは、他の宿泊客から、「グスマン一族の物語」を聞かされる。

これはセビリアの富豪で独身老人のグスマンと、その妹夫婦の一家に関する物語である。妹はドイツのプロテスタントの音楽家ヴァルベルク (Walberg) と駆け落ち同然で結婚する。プロテスタントであるためスペインには住めない。ところが、死期の迫ったグスマンは、やはり妹ら血族に看取られて死にたい、財産も彼女に残したいと考え、妹の家族をドイツから呼び寄せる。ドイツで貧窮していた彼らは、喜び勇んでセビリアに向かう。だがグスマンの財産を狙うカトリック司祭たちの陰謀により、妹は兄に会えないばかりか、兄が死んでも財産は遺贈されない。絶望のさなか、ヴァルベルクはメルモスの訪問を受ける。魂を寄越せば金持ちにしてやるというメルモスの誘惑を、もう少しのところで受け入れそうになる。しかしここでも、メルモスは誘惑に失敗する。最終的には、グスマンの遺言書が司祭の手による偽造であったことがわかり、本物の遺言書が発見されハッピーエンドとなる。何よりこれは、ドイツのプロテスタントが、悪の化身たるスペインのカト

リック教会に虐げられる物語である。

さて、この物語を聞いたアリアーガは、翌朝宿屋を出て、案内係を複数連れ驢馬で旅を続ける。だが途中で案内係に裏切られ、前払い金だけ持ち逃げされ、山中に迷い込む。そこに、再びメルモスがやってくる。メルモスの案内で二人は宿屋に辿り着き、ここに宿泊する。メルモスは宿屋でアリアーガに物語を聞かせる。「恋人たちの物語」と題されており、4章に及んでいる。外枠となるイシドーラおよびアリアーガの物語は1683年に設定されていたが、ここでメルモスが語る物語は、1640年代の清教徒革命と、その後の王政復古(1660年)、およびそれ以後現在(1683年)にまで及ぶ歴史物語である。メルモスはつぎのように語り始める。

さあ、アリアーガの御仁、身の危険の恐怖も取り去られたらうから、坐ってわたしの話を聞いて頂きたい。商売上の経験から、またあなたの性質なら嫌でも持ってしまうだろう一般的な知識から、その国の歴史と異端者どもの風習は、あなたも十分ご存知のはずだ。イングランドと呼ばれる国のことですよ。(443)

つまりはここで初めて、メルモスはプロテスタント国イングランドの物語を語ることになる。

歴史上の人物も登場するが、ヒロインはエリナー・モーティマ (Elinor Mortimer) という女性である。モーティマ家はロジャー・モーティマ卿という貴族に発し、彼は宗教改革の当時は改革派であったが、その後王政復古により、息子のアーサーは王党派となり、孫のロジャーも王党派に属することになる。この最後のロジャーに孫娘が二人おり、ひとりがマーガレット(国教徒)、もうひとりがエリナーである。彼女は清教徒の教育を受けている。エリナーが恋するのが、やはりロジャー・モーティマの孫、エリナーの従弟の、ジョン・サンダル (John Sandal) という18歳の海軍大佐である。この二人の恋物語はロマンティックな筆致で描かれ、ラドクリフを思わせる〈崇高〉な風景描写もある。

ロジャー・モーティマは生前、もし孫娘マーガレッ

トがジョン・サングルと結婚すれば財産のすべてをマーガレットに譲る、もしエリナーがジョンと結婚すれば、5千ポンドをエリナーに与える、との遺言をしたためていた。当初は秘密にされていたのだが、ジョン・サングルの母親がこれを知り、エリナーとジョンの結婚を阻止しようとする。結婚式の当日、ジョンは花嫁のエリナーを残し、姿を消す。このため、その後エリナーはヨークシャーに引き籠もり、母方の清教徒の叔母と二人で、質素で敬虔な隠遁生活を送ることになる。

その後、彼女のもとにマーガレットから手紙が届く。「わたしとジョンは喜んであなたをモーティマ城に迎えます」という手紙である。エリナーは一縷の望みを抱いて城に向かう（これが1667年頃のこと、と記されている）。しかしながら、彼女はジョンがもはやマーガレットのものであることを知らされる。そして婚礼の日、エリナーはひとりこの城を出て行く⁽⁴⁾。

エリナーがヨークシャーに戻ると、清教徒の叔母はすでに死んでいる。しばらくの後、マーガレットから手紙が届き、エリナーは呼び戻される。マーガレットは産褥にあって、双子を産むと死んでしまう。死の間際、彼女は夫ジョンと従妹エリナーの手を取って、結び合わせる。

こうなると、そもそも陰謀を企んだジョンの母親も、罪を白状せざるを得ない。この母親にも死期が迫っており、司祭に自分の罪を告白する。エリナーとの結婚式直前にジョンが失踪したのは、母親の陰謀によるものであった。つまり、ロジャーの遺言の内容を知ったジョンの母親は、息子に、エリナーはおまえの妹であり、おまえの母親は自分ではなく、エリナーの母親と同じだ、したがってエリナーと結婚すれば近親相姦になる、と偽り、エリナーとの結婚を思い留まらせ、マーガレットと結婚させたのだった。かくして、エリナーはかつての恋人ジョン・サングルとともに、静かにヨークシャーで暮らすことになる。だがジョンは、妻を亡くし双子も亡くし、さらに母親の陰謀という事実を知らされたため、完全に理性を失ってしまう。エリナーは、もはや廃人同様のジョンを介護しながら生きていくこと

になる。

この寂しい生活のさなか、夕方になると彼女のもとを頻繁に訪れ散歩に誘う、「謎の人物」が登場する。（これはあくまでメルモスがアリアーガに語る物語なのだが、メルモス自身がこれを「怪人」もしくは「謎の人物」と呼んでいる。）しかし、彼女は近所の牧師にこの男の出す「条件」について打ち明ける。そこで、いつものように、夕方彼女がこの人物と散歩しているところに、牧師がやってくる。牧師の姿を見て、怪人は「恐怖の表情」を呈する（498）。これ以後、怪人物は二度とエリナーの前に姿を現さなくなる。

この挿話において、牧師はエリナーに、メルモスに関する詳細を語っている。数少ないメルモスの過去に纏わる記述である。

牧師がエリナーに告白したところによれば、彼はメルモスという名のアイルランド人を知悉しており、その多方面にわたる博識、深遠な知性、知識への強烈な欲望は牧師の興味を大いに惹き、二人を実に親しい間柄にするに十分であった。イングランドで紛争が起ると、牧師は父親の一族とともに、オランダへの逃亡を余儀なくされた。そこで彼は再びメルモスに会った。後者はポーランドへの旅を提案し、その提案は受け入れられ、二人ポーランドへと旅立った。ここで牧師は、ディー博士(Dr Dee)やポーランドの冒険家アルバート・アラスコ(Albert Alasco)に纏わる多くの奇怪な物語を語った。アラスコはイングランドにおいてもポーランドにおいても、彼らの仲間であった。牧師がさらに語ったところでは、仲間であったメルモスは、「キリストの御名を唱えるすべての者ら」〔「ティモテオへの第二の手紙」第2章19節〕にはただただ忌わしいものと考えられている、あの術の研究に、取り返しのつかぬほど没頭していると思った。知性溢れる船の推進力はあまりに強大で、岸に沿って進むだけの狭い海では飽き足らなくなった。発見の航海に乗り出すことを切望した。言い換えれば、メルモスが加わったのはあの山師たちの群れ、いやそれ以上に悪い。口にすべ

からざる条件で、来世の知と力を彼に約束した族だったのだ。(498-99)

ここで語られるイングランドでの「紛争」とは、1660年の王政復古である。つまりは革命政府解体後、チャールズ二世の即位によって再び弾圧の憂目に遭うプロテスタント教徒（共和国政府の重鎮であった詩人ミルトンもまた、身柄を拘束され財産を没収された事実は周知の通りである）であったから、メルモスも友人の牧師も、オランダへ亡命せざるを得なかったのだ。

さらに、二人がポーランドに旅立った理由は、当時の「ボヘミア」が意味するところを汲み取れば十分に納得が行く。錬金術師ジョン・ディーに関して、フランセス・イエイツの『薔薇十字の覚醒』には詳しい⁽⁵⁾。附言しておこう――

エリザベス・ステュアート(Elizabeth Stuart, 1596-1662)は、スコットランド王ジェームズ VI 世すなわちイングランド王ジェームズ I 世と王妃アン⁽¹⁾の長女であり、やがて清教徒革命で処刑されるチャールズ I 世の姉である。彼女が、プファルツ選帝侯フリードリヒ V 世(ボヘミアの「冬王」)の妃となる。プロテスタント強国イングランドの、しかもその礎を築いた女王と同じ名を持つ王妃とあれば、ボヘミアの反ハプスブルグ、反カトリック勢力が、この選帝侯の治世に期待をかけたのも当然である。が結局は期待外れで終わる(その後18世紀に入ると、ハノーヴァー家のジョージ I 世(1660-1727)は、このエリザベスの孫であることを根拠に、1714年イギリス王位を継承する。18世紀のいわゆる「ジョージアン」文化は彼から始まる)。ようするに、ルドルフ II 世(1552-1612) 亡き後の17世紀、プロテスタントの覇者である新興国イングランドが、ボヘミアの地(現在のポーランド南部からチェコ北部)で反ハプスブルグ勢力の後見人となり得た事情、そして、真のキリスト教的博愛を唱える、プロテスタント的改革精神といったものが、友愛の理念と結びついて「薔薇十字団」という秘密結社を生み出し継承し得た事情、さらにはそれが、当時の知の最先端、科学技術の最先端を行くもの、と見なされていた事情――今でこ

そ「神秘主義」や「魔術」と呼び習わされる事象(研究)も、実際は「反カトリック」「反ハプスブルグ」の革新勢力を形成しながら、とりわけプロテスタント強国イングランドを後ろ盾に発展したものであった――、これらの歴史的背景を考慮に入れば、17世紀に生まれたメルモスが、近代人の代表としてポーランドに赴いたことは、非常に理に適った行動と言える。

牧師の語るところでは、その後数年間メルモスには会わなかったが、牧師がドイツを発とうとする前夜、プロテスタントの牧師に看取ってもらいたがっている臨終の男がいるので見舞ってほしい、との言伝により、カトリックの教区にあるその家まで出かけて行く。そこに横たわっていたのはメルモスであった。彼はつぎのように語る。

わたしは死ぬ。わたしの人生がどのようなものであったかは嫌というほど知っていよう。わたしの罪は偉大なる墮天使のそれ――高慢と知性の驕りだった！ 死に値する最初の罪――禁じられた知への無限の大望だ！ わたしはもうじき死ぬ。いかなる宗教の儀式も求めはしない――自分にとって意味のない、あるいは意味など持たない言葉など、聞きたくはないのだ！ 怯えた顔をするな。わたしがおまえを呼んだのは、厳粛に誓って欲しいがためだ――わたしが死んだという事実についてはだれにも秘密にしておいてほしい。いつ、どこで死んだかは、だれにも知らせないでくれ。(499)

こう語っておよそ1時間後、深夜0時にメルモスは死ぬ。ところが、牧師はその後いたるところでメルモスの噂を耳にし、そしてついに、エリナーと一緒にいるところを目にしたのだった。エリナーは牧師に、それがどういう噂であったかを尋ねるが、牧師はつぎのように語って話を締め括る。

「これ以上探らぬがよい」と牧師は言った。「あなたはもはや人間の耳に聞かすべき以上のことを聞いてしまった、あるいは人間の心が思い描くべ

き以上のことに立ち入ってしまった。神の御力により悪しき者の攻撃を追い払いただけで十分であろう——試練は凄まじいものであったが、その結果は栄光に満ちたものとなろう。もし敵の誘惑が執拗であるなら、思い出すがよい、やつはすでに追い払われてしまったのだ、地下牢の恐怖、死刑台の恐怖のさなかであっても、癲狂院の叫び声のなかでも、異端審問所の焔のなかでも。やつはだれよりも御し易いと思っていた相手、失意のどん底で精根尽き果てた相手からも、制圧される運命にある。やつは生贄を求めて地上を巡ってきた、「食い荒らすものを探しながら」〔「ペトロの第一の手紙」第5章8節〕。そしていかなる餌食も見出せなかった、たとえ地獄で期待する者たちのあらゆる貪欲さをもってして、それを探し求めたときでさえもな。やつに敵対する者のうち、もっともか弱き者でさえ、つねにやつを無力にし得る力をもって、やつを撃退してきたのだということ、このことをあなたの栄光と至上の喜びとするがよい」(500-01)

ある種の結語とも見える言説である。自身プロテスタント牧師である作者マチューリンが、登場人物の牧師に託して語っているのは、逆境にあっても悪魔の誘惑を斥け得る人間の強さである。不幸な人生を送ったエリナーの魂も、やがては救われるであろうことが暗示されている。しかし、小説の語りとしてはどうしても見落とすことのできない点がある。この部分、この「恋人たちの物語」全体が、やはりメルモス自身によって、聞き手アリアーガに向けて語られているのだ。牧師の言説を伝えているのがメルモス自身である以上、彼は誘惑することが使命であるはずの自らの存在を、すでにして否定している。人間は自分の誘惑を乗り越える力を備えているのだ、と自ら証明して見せていることになる。おそらくはリアリズムや人物造形の欠陥と呼べようこうした語りの亀裂は、しかしながら作者の主義主張を代弁して余りあるものであり、むしろ読む者を圧倒する、強引な語りの威力を見せつけている。

その後、エリナーに養われていたジョンは、死の

直前で正気を取り戻す。夫を看取ったエリナーもまた、そのことに最後の幸福を感じながら、穏やかに息を引き取る。

メルモスの死

以上の「恋人たちの物語」を聴かされたアリアーガは、なぜメルモスが自分にそのような長い物語を語ったのかと、不平混じりに訝る。そこでメルモスは、ならばもっと短い、おまえの興味も湧くはずの物語を聞かせようと言い、インド洋の離れ小島に暮らしたスペイン娘の話始める。これは当然、イマリー／イシドーラの物語なのだが、これによって、そもそもどのような経緯で彼女がその島に辿り着いたかも明かされる。

マドリッドに住むある商人は、商売の雲行きが怪しくなると、東インド諸島に落ち着いた縁者の誘いで、妻と息子を伴って当地に渡る。そこで事業が成功すると、乳母と幼い娘を呼び寄せるのだが、運悪く彼女らを乗せた船は難破し、二人は離れ小島に辿り着く。乳母はやがて餓死するが娘は島に生える果物などを食して生き残る。その後別の難破しかけた船がたまたまこの島に辿り着き、スペイン語を話す娘を見つけ、インドのベナレスに住んでいた母親と兄のもとに連れ戻す。後に母と二人の子はマドリッドに帰り、父親の帰宅を待つ。父親はそろそろ長旅を終え、長年見失われていた娘のために、結婚相手連れてスペインに戻ろうとしている——こうした、現在までのアリアーガの物語を、メルモスはアリアーガに語る。アリアーガはもちろん、それが自分の物語だと知る。そこでメルモスはアリアーガに忠告する——「娘を見据えている眼がある。その眼力は伝説の蛇のそれよりも致命的だ！」(503)——こうしてメルモスはアリアーガの前から姿を消す。

ここで物語は、イシドーラが姿を消したマドリッドの自宅に戻る。娘が消えたことを夫に知られたくない母親は、ホセ神父とともに必死で搜索するが、ふと思い立って娘の部屋に行くと、すでにイシドーラはベッドで眠っている。これ以後、イシドーラのモンティージャとの婚礼の準備が始まる。だが密かに

メルモスの妻となっていたイシドーラは、夜な夜なメルモスの訪問を受け、その度に、自分を連れ去ってくれと懇願する。ある晩彼女はメルモスに、子どもができたことを知らせる。このためメルモスは人間的な優しさを示すのだが、イシドーラは、この子が生まれるときには自分が死ぬ予感がする、と語る。そしてメルモスに向かい、生まれたらこの子をキリスト教徒にしてほしいと頼み、メルモスもこれを承諾する。モンティーヤとの婚礼の夜に、メルモスはイシドーラを連れ去ることに決める。

やがて父親のアリアーガが帰宅し、モンティーヤとの婚礼が執り行われるが、メルモスは婚礼の仮面舞踏会に忍び込み、イシドーラを強奪しようとする。イシドーラの兄は剣を抜いてメルモスに挑むが、たちまちメルモスに刺し殺される。この争乱のさなか、メルモスは消え去り、兄を殺されたイシドーラはその場で気を失う。

その後意識を取り戻したイシドーラは、自分ですでにメルモスの妻であると主張する。だが二人が廃墟の修道院で結婚式を挙げた夜、二人の後をつけていた召使がメルモスに殺されていたことが判明し、また式を挙げた司祭というのは、その前夜に死んでいたことが判明する。つまりこの司祭は、すでに死体か亡霊であった。これらの事実が明るみに出るいっぽう、イシドーラは陣痛に襲われ、一人の女兒を産み落とす。悪魔の子と考えられはするが、ホセ神父はこれに洗礼を施す。

出産後、イシドーラは異端審問所の獄中で目を覚ます。つまりは悪魔の遣いと通じ、その子を産んだという理由で、赤子とともに投獄されている。尋問においても、彼女はメルモスのことだけは語ろうとしない。そこで審問官は赤子を修道院に入れると脅し、イシドーラに自白を迫る。だが赤子はやがてイシドーラの腕の中で死ぬ。

一人牢獄に残ったイシドーラは、自分にも死期が迫っていることを知り、ホセ神父を呼び告白する。神父に向かい、自分は最後の誘惑をはねのけたのでこれで天国に行けるのでしょうか？と尋ねる。昨夜メルモスがこの独房を訪れ、交換条件を飲めば自由の身にしてやる、と語ったのだった。つまりは妻イシ

ドーラにせよ、最後にはメルモスの誘惑を拒絶したことになる。打ち明けて後、イシドーラはホセ神父に看取られて息を引き取る。

以上でスペイン人アロンソ・モンサダの語る物語は終わる。そしてここではじめて、彷徨えるメルモスが、アロンソと若きジョン・メルモスの目の前に姿を現す。彼は二人の若者に、つぎのように語る。

「わたしは地上では恐怖の的だった。しかし地上の住民には悪であったことはない。だれも自ら同意せずしてわたしの運命を引き受けることはない——そしてだれも同意はしなかった——運命をとともにせずして、恐るべき劫罰を受けることなど、だれひとりあり得ないのだ。わたしひとりが劫罰を受けねばならない。もしわたしが手を差し伸べ、禁断の樹木の実を食したのであったなら、わたしは神の御前、天の国から追放され、不毛と呪いの世界を永遠に彷徨い続けるのだろうか？

「わたしに関して伝えられているところでは、わたしは人類の敵から、人間に割り当てられた以上の生存期間を手に入れたそうだ——それから、何らの妨害も受けず瞬時に空間を移動し、遠く離れた場所にも思うがままに赴ける力、嵐の前に薙ぎ倒される希望もなくこれに向かって行ける力、地下牢に入って行ける力——その門もわたしが触れれば亜麻布か屑繊維のように脆く崩れ落ちる。このような力がわたしに与えられたと言われている。そして惨めな者たちが恐怖の極みにあるとき、わたしが彼らを誘惑し、わたしと立場を交換するという条件で、彼らに救いと免責を約束する、とも言われている。もしこれが本当であるとしても、それはただ、わたしが名指すことの許されぬ男〔イエス・キリスト〕の名である〕の唇によって語られた真理、人の住み得る世界のすべての人間たちの間で鳴り響いた真理を、証明することになるう」(537-38)〔傍点部は原文イタリック〕

これを見れば、彼の本来の目的は、人間を誑かすことではなく、それをはねつける人間の強さを確認することにあるかのようだ。ローマカトリック教会

の悪や不条理に虐げられても、最後にはプロテスタントの信仰に縋り困難を乗り越える、人間の強さと可能性を主張している。しかも、彼は自分ひとりが劫罰 (penalty) を受けて死ぬのだと語っている。まるで殉教者のような趣がある。

語り終わるとメルモスは、少し休ませてくれと言ひ、ジョンの書斎で眠る。翌日の昼頃、ジョンとアロンソが部屋に入ると、この数時間でメルモスの様子は変貌している。顔には「老衰の皺」が刻まれ、頭髮は「雪のように真白」になり、すっかり老け込んでいる (後にオスカー・ワイルドが自身の小説『ドリアン・グレイの肖像』(*The Picture of Dorian Gray*, 1891) でこのモチーフを利用したことは明らかだ。ワイルドはその後同性愛裁判で有罪となり投獄されるが、出獄後パリに暮らし「セバスチャン・メルモス」 Sebastian Melmoth の偽名を用いたことは広く知られている。事実マチューリンはワイルドの大叔父にあたり、マチューリンの妹の娘がワイルドの母親である)。

メルモスは若者たちに、今夜恐ろしい物音を聞いてもこの部屋に近づくな、と言ひ二人を部屋から追い出す。その日の深夜、メルモスの閉じ籠った部屋からは壮絶な騒音や悲鳴が響き渡る。夜明けに音が止み、二人が部屋に駆け込むと、すでにメルモスの姿はなく、床には砂地か泥沼を歩いたような足跡が残されている。二人がこれを辿って行くと、海辺の岩場の突端に辿り着く。崖には、生前メルモスが首に巻きつけていた布端が引っかかっている。ジョンとアロンソは、言い知れぬ恐怖の視線を交わしあって、屋敷に戻る。全4巻(39章)からなる長大な物語の結末である。

反カトリシズム／反帝国主義

英国のゴシック小説は基本的に反カトリック小説である。この点は『メルモス』にもはっきりと見て取れる。アロンソ・モンサダも言う——「カトリック国では、宗教は国民演劇です。そこでは司祭たちが主要な役者となります」(Oxford World Classics, 164-65)。ルイス (Matthew Gregory Lewis, 1775-

1818) の『マンク』(*The Monk*, 1796) もそうであったように、舞台はカトリック国であるスペインやイタリアとなる。ようするにこの小説形態は、カトリック教権制度が支配する古い専制国家に対して、近代国家の代表であるイギリスの優位を語り、自国の読者層の優越感を煽る役割を果たした。裏を返せば、これは反カトリックのイデオロギーによって育成された物語群にほかならない⁽⁶⁾。

ゴシック小説は18世紀に始まる。1689年に名誉革命が終結して後に誕生する政治的マジョリティ、プロテスタントの中流階級が読者層となる。だが、オランダのオラニエ家から迎えられたウィリアムによる王位継承が、イギリス歴代王家のなかでとりわけ合法性 (= 嫡出性 *legitimacy*) の欠如を際立たせている点は否めない。となれば、彼ら議会派が首尾よく排除したカトリック教会の権威や圧力、カトリック教徒の抱く迷信や軽信性といったものが、その後おぞましくも排除すべき不安として立ち現れてくるのは当然であろう。この点でゴシック小説は、フロイトの言う *uncanny* や、クリステヴァの言う *abjection* といった観点から論じることにも可能になる⁽⁷⁾。

ヴィクター・セイジは、ゴシック小説の人気の高まった時期が、ちょうどカトリック解放運動の時期と重なるのではないかと見る。アイルランドにおいてカトリック解放運動は1770年代に盛んになり——その後1798年、ウルフ・トーン (Wolfe Tone, 1763-98) を中心とした *United Irishmen* による反乱という失敗を経るが——、1829年、ついにカトリック解放令 *Emancipation Act* が成立する。これがカトリック教徒にとっては望ましいものであったとしても、その後恐怖小説 *horror novel*——セイジは *Gothic novel* よりもこちらの呼び方を採用している——は、19世紀さらには20世紀に入ってから、カトリック対プロテスタントの確執、教義上の対立であると同時に政治的な対立でもあるそれを背景として、末永く書き継がれて行くのである⁽⁸⁾。

だとすれば、その主要な舞台はおのずとアイルランドになろう。ロマン主義が終息した後もなお、宗主国からの独立運動が高まりを続けるアイルランドにおいては、ダブリンに住むアングロ=アイリッ

シュの作家たちが、ゴシックの系譜に連なる恐怖小説を書き続ける。たとえばディケンズ(Charles Dickens, 1812-70) やウィルキー・コリンズ(Wilkie Collins, 1824-89) といったイングランドの作家たちは、カトリック教会が暗示する「おぞましいもの」「不気味なもの」を描くよりも、最後に理性によって解決される〈ミステリー〉のほうを好む。いっぽうおぞましい異形の怪物や怪人は、もっぱらアングロ＝アイリッシュの、レ・ファニューヤストーカーによって描かれることになる。

セイジの言う恐怖小説の伝統は、そこにアン・ラドクリフ(Ann Radcliffe, 1764-1823) に発する「テラー」対「ホラー」という二分法を導入すれば⁽⁹⁾、ラドクリフ以来のテラー型に向かうイングリッシュに対し、アイリッシュはマンク・ルイス以来のホラー型を担うことになった、と言えるかもしれない。(さらに敷衍すれば、この両者を「デュパン」ものの推理小説と「アラベスク」の短篇という、二種類の形態に書き分けたのが、アメリカのエドガー・アラン・ポーではなかったか。)前者がいわゆる「ミステリー」や「探偵小説」の伝統を形作り、後者が「ファンタジー」や「マジック・リアリズム」を生んで行く。いささか図式的ではあるけれども、アイルランドの現代小説を眺めれば、それが少なからず後者の伝統を受け継いでいることも見て取れる。

しかし、イングランドにおいて「悪」の象徴とされたカトリック教会も、アイルランドにおいては政治的な被差別民族の精神的拠り所である。イギリスのゴシック小説で不条理な目に遭うのはプロテスタント教徒だったが、現実のアイルランドではカトリック教徒の側であった。現実を目の前にすれば、アングロ＝アイリッシュ／プロテスタントの作家は、カトリック教会がいかに不条理なものであるかを主張し、自らが優越的な立場——いわゆる *ascendancy*——であることの、合法性(またしても *legitimacy* の問題である)を言い募る必要に迫られる。デイヴィッド・パンターは、先のモンサダの言葉——「カトリック国では、宗教は国民演劇です。ここでは司祭たちが主要な役者となります」——を引いて、つぎのように論じている。

これは大変重要なくだりである。マチューリンがゴシックのモチーフと構造を、再利用したがっていたことを明確に示しているからだ。このモチーフと構造は、すでにして特定の宗教的議論に——つまりは政治的議論に——長年貢献してきたがために、老化を来たしているものである。非道な行為、暴力による変化、ひとつの立場から別の立場に移ることの不可能性、首尾一貫した歴史の不在。こういったことはすべて、アイルランドという国の在り方の合法性に関する議論と、プロテスタント・アセンダンシーの本質に関する議論を、構築してきた主要な要因である。こうした議論の過程においてこそ、征服者であるイングランドの覇権が、アイルランドの心臓部に植えつけられたのだった。思うに、読者がこのテキストにおいて致命的な両義性と矛盾に直面するのは、ここにおいてである。『メルモス』は迫害の物語であるけれども、その迫害の性質が、そこに描かれている〔18世紀のスペインという〕状況を、激烈にも越えてしまうように見える瞬間というものがある。換言すれば、語りのほうは、プロテスタントのマイノリティを大いなる権力に翻弄されるものと位置づけているように見受けられるが、上述の通り、アイルランドにおいて権力から疎外されているのはカトリック・マジョリティのほうであり、したがってマチューリンのテキストのねじれや放縦さの幾ばくかは、実のところ、このどうしようもない二重の知覚を和解させることの、もしくは理解することの、困難さに発しているのである。⁽¹⁰⁾

事実、作者自身が制御不能に陥っているかのように、この小説の語りは大いに錯綜している。アロンソ・モンサダは自身の過去を語っているとはいえ、今は失われている弟の長い手紙をそっくりそのまま引用できる。ユダヤ人アドナイジャは、なぜかイマリーの苦悶やメルモスの逡巡を内的独白として語るができる。語りの技法として見れば矛盾だらけと言える。しかし、ひょっとするとこれ(パンターの言う「ねじれや放縦さ」)は、端からその種の小説技法に——今でこそ「近代リアリズム小説」と呼ば

れる形態の「約束事」に——まるで無関心な書き手によるものではなかったろうか。さらに、悪魔の手先と見える放浪者メルモスが、ほとんど作者の代弁者とも思えるほどにカトリックを糾弾する箇所に至っては、これは一種の激烈な宗教論文ではないかとさえ思われてくる。「ピューリタン」というカルヴィニスト以上に、より論理的なフランスのカルヴィニスト「ユグノー」の教説、と考えれば、パンターの指摘、アングロ＝アイリッシュとしてのジレンマなど、作者にとってはまったく問題にならなかったのではないかとまで仮定したくなる。つまりところマチューリンは、被差別民族であるカトリック土着民には、いかなる同情も感じていなかったのかもしれない。たとえば冒頭の章に描かれるカトリック教徒の姿は、同時代のアイルランド作家ウィリアム・カールトンが描いた戯画的な農民像同様、滑稽極まるものである。死の床にある伯父は、家政婦に臨終の祈りを唱えるよう命じるが、この無学なカトリックの老婆は、初めて見るプロテスタントの祈禱書から、「埋葬の祈り」に続いて「産褥後の女のための祈り」までを読み上げる（15-16）。

読者に何より強烈な印象を残すのは、アングロ＝アイリッシュとしてのジレンマよりも、そのようなジレンマをものとしめない、作者の厳格なプロテスタント信仰、世界の悪を糾弾する熱情である。マチューリンにとってなにより許し難い矛盾は、そもそもカトリシズムが、あるいはカトリック教会が、本来はキリストの教えに始まったものでありながら、強大になることで悪を育み悪を隠蔽する組織にまで成長したことであったろう。だとすれば、国家の権力を笠に着るイギリス国教会にせよ、断罪は免れない。この意味でマチューリンのアンビヴァレンスには、後のレ・ファニュやストーカーの抱えるアンビヴァレンスとの、明確な区別が必要となる。

この点については、マッシュミリアーノ・デマータが興味深い指摘をおこなっている。上述のようなマチューリン像を補強しもする指摘——反帝国主義者としてのマチューリン像——である。デマータの論旨は、マチューリンは一世代前のベックフォードと同じく、旅行記 travel writing を数多く読んでいた

が、ベックフォードの時代なら読者のオリエンタリズムを掻き立てただけの旅行記も、マチューリンの時代ともなると、帝国の植民地支配の恐るべき実体を明かすものとして読み解かれ得る。マチューリンの場合、旅行記に描かれる逸話は、帝国主義批判の実例として利用されたのだ、というものである。

帝国というものは専制政治によって個々人を虐げ、転向を強いるものである。あらゆる占領・征服には邪悪な一連の過程が付き物なのだ。カトリシズムはモンサダを食らい尽くしたが、当然それ自体が帝国なのであり、地球上の津々浦々を支配したと言ってもよく、またこれ自体が、現地人を改宗させるための植民地化の道具であった。スペインの異端審問所で迫害の対象となったムーア人はと言えば、かつてはモロッコのユダヤ人を支配し、しばしば残虐に殺しもした。それが改宗を拒んだ者の運命であった。だがもちろんのことながら、マチューリンの時代にあって、その支配が一大陸に留まらない唯一の帝国、アイルランドをも支配した帝国は、大英帝国であった。⁽¹¹⁾

この見解に従えば、マチューリンは、スペインやその異端審問所を批判しながら、その実大英帝国によるアイルランド支配を批判していた、ということになる。ことはカトリック対プロテスタントという二項対立に収まりきれない。

マチューリンの時代のアイルランドは、確かに英帝国の支配が確立された時代であった。アイルランド併合法 Act of Union が 1800 年に可決されて以来、アイルランド自治は失われていた。だがいっぽうでは、目に余るカトリック差別が解消される方向に向かいつつあった。前述の通りカトリック解放令は、『放浪者メルモス』が出版されて 9 年後(1829 年)に成立している。

マチューリンが、カトリシズムと同時にイギリスの帝国支配を批判していたとすれば、それはそれで筋は通る。だが、アイルランド国内で支配階級と非支配階級の現実的な関係を目にすれば、アセンダシーの側はさまざまな矛盾も感じざるを得なかった

だろう。現実の無学なカトリック農民たちを目にして、啓蒙の必要とその無益さを思わずにいらなかったのではないか。(冒頭のコミカルな農民像にそれは現れている。)となればやはり、彼自身が、このアイルランドという地を離れ、瞬時に世界を移動できる「怪人」に焦がれたとしても不思議はない。wanderer と exile は、案外近いものであるかもしれない。世界の果てのどこかに消え去りたいというペシミスティックな世界観が、ここにはたしかに感取できるのである。

ロマン主義のゴシック

言われなき罪によって不当に投獄・監禁され、恐怖と絶望のうちに留め置かれる、という状況は、ウィリアム・ゴドウィン (William Godwin, 1756-1836) のベストセラー小説『ケイレブ・ウィリアムズ』(Caleb Williams, 1794) が描き出した世界であった。ゴドウィンは政治思想家として、社会悪を暴く目的でこれを執筆したのだろうが、(本人にとってはおそらく不本意だったことに) 彼の著書のなかではほかのどの政治論文よりも売れたという。ようするに、当時の読者の不安な心を掴んだのであって、これは現代の日本にも通じるものであるかもしれない。官僚機構や政治家の悪を言い立てるよりも、冤罪で投獄された犠牲者のドキュメンタリーのほうが大衆へのインパクトは大きいだろうし、またシンパシーも得やすいに違いない。わが国でも散見されるこの種の状況と、おそらくはあまり変わりのない状況が、18世紀後半から19世紀前半にかけてのイギリスにも当然のごとくあり、そしてフランス革命から恐怖政治、ナポレオンの台頭等々、いわばロマン主義時代の動乱を経た作家たちが、不安と希望の闘ぎ合いのなかで生きる人物像を造形していった——そんな時代を思い浮かべることができる。

たとえばデイヴィッド・パンターとグレニス・バイロンはつぎのように語る。

重要なことは、メルモスが最終的に死んだところで、世界は浄化されない、ということだ。これ

はたとえば、M・G・ルイスの『マンク』でアンブローシオが死んでも、アン・ラドクリフの『イタリア人』でスケドニーが死んでも、同じである。なぜなら、メルモスは、彼自身が悪の主というわけではなく、むしろ一人の代理人に過ぎないのであって、実際はほかの人間たちが永遠に生み続ける悪の産物だからである。この〈より大きな悪〉なるものが存在しなければ、魂の取引を持ちかけられそうな犠牲者も、彼には手に入らないのである。⁽¹²⁾

つまるところ世にはびこる「悪」の弾劾こそが作者マチューリンの意図だった、ということになる。だが同時に、自分の力では如何ともし難いという無力感が、メルモスの人物造形においては一種の「サディズム」として現れているように思われる。

サド (Marquis de Sade, 1740-1814) がルイスの『マンク』を読んだらしいことは指摘されているが、ルイスがサドを読んだ可能性はない。いっぽう時代が下るマチューリンの場合、サドを読むことも不可能ではなかったはずだが、当時極悪のいかがわしい小説と考えられていたフランス語の作品を、アイルランドのプロテスタント牧師が入手して読んでいた可能性は低い。だがマチューリンの分身とも思えるメルモスが、純真無垢なイマリー／イシドーラに向かい、人間の世界とはこれほど醜いものなのだ、これほど残酷なものなのだと言き、同時にこの現実認識で責め苛み、しばしば悲鳴を上げさせ気絶させる、という行為と心情は、メルモス自身の、あるいは作者自身の、行き場のないペシミズムが他虐性に向かうという、典型的なサディズムの症例と思われる。この点では、マチューリンは立派にサドの同時代人と見える。しかし、必ずしもここにあるのはペシミズムばかりではない。最終的に悪魔の誘惑を拒絶し得た少なからぬ登場人物たちには、人類に対する一縷の希望を見出してもよいだろう。ゴシック全盛時代の掉尾を飾る小説は、同時にヒューマニズムの終焉を彩る、代表的なロマン主義小説とも言えるのである。

註

- (1) 各国の流行の経緯については次の書が詳しい。中沢新一、鶴岡真弓、月川和雄編著『ケルトの宗教ドルイディズム』岩波書店1997年、117-267。
- (2) Matthew Arnold, *On the Study of Celtic Literature*, 1867; *The Works of Matthew Arnold in Fifteen Volumes*, Vol.5, reprinted AMS edition, New York, 1970.
- (3) Charles Maturin, *Melmoth the Wanderer*, edited with notes by Douglas Grant, with an introduction by Chris Baldick, Oxford U.P., 1989; 2008. 以後テキストからの引用にはこの版のページ数を附す。なお、本論での引用は研究文献も含めすべて拙訳であるが、マチューリンのテキストの訳出にあたっては、富山太佳夫訳『放浪者メルモス』上・下巻(国書刊行会1977年)を参照した。
- (4) この箇所には作者による註があり、「この場面全体が事実に基づくものであるから、抑揚は単純にして、効果は深淵なる調べを、以下に附記しておく」と記され、2小節のピアノ用の譜面が掲げられている(489)。
- (5) Frances Amelia Yates, *Rosicrucian Enlightenment*, Routledge & Kegan Paul, 1972. 邦訳、フランセス・イエイツ『薔薇十字の覚醒』山下知夫訳、工作舎1986年。
- (6) Angela Wright, *Gothic Fiction: A reader's guide to essential criticism*, Palgrave Macmillan, 2007, 78-79.
- (7) Robert Miles, "Abjection, Nationalism and the Gothic," in *Essays and Studies 2001: The Gothic*, ed. Fred Botting for the English association, Cambridge: D.S. Brewer, 2001, 47-70.
- (8) Victor Sage, *Horror Fiction in the Protestant Tradition*, Macmillan, 1988, 28-29.
- (9) ラドクリフは1826年のエッセイにおいて、エドモンド・バークに依拠し、文学におけるterrorとhorrorを区別している。Ann Radcliffe, "On the Supernatural in Poetry," in *New Monthly Magazine* 16 (1826): 145-52, quoted in Fred Botting, *Gothic*, Routledge, 1996, 74.
- (10) David Punter, "Scottish and Irish Gothic," in *The Cambridge Companion to Gothic Fiction*, ed. Jerrold E. Hogle, Cambridge U.P., 2002, 115-16.
- (11) Massimiliano Demata, "Discovering Eastern Horrors: Beckford, Maturin and the Discourse of Travel Literature," in *Empire and the Gothic: the Politics of Genre*, ed. Andrew Smith and William Hughes, Palgrave Macmillan, 2003, 29.
- (12) David Punter and Glennis Byron, *The Gothic*, Blackwell, 2004, 205-06.

附記：本稿は、現在科学研究費補助金の交付を受けて行なっている研究(基盤研究B)「亡霊たちの近代——アイルランド小説通史」(課題番号21320054)の成果の一部である。